9 月 26 日のメッセージ

聖書：テサロニケの信徒への手紙二　3：　6－13

「たゆまず善いことをしなさい」

神が示される道は平坦なものばかりではありません。山あり谷あり、これが私たちの現実です。

「しなくてよい苦労ならしたくない。」これが私たちの本音でしょう。「なるべく楽に済ませたい。確実な成功を求める。失敗する可能性があるなら、チャレンジさえしない……」そんな風潮もあります。時代の閉塞感がそうつぶやかせるのでしょうか。

神の国がいつ実現するのかわからない中で毎日を過ごすことは、私たちの想像以上の重さを持っていたのかもしれません。「すぐにでもその時が来るのならば、今、何をしても意味が無い」と諦める者もあったでしょう。現実の厳しさに「すぐに来てほしい」と積極的に今を生きることをやめる者もあったでしょう。将来に待つ栄光よりも、現実の栄光、今の満足を求める者もあったでしょう。

希望を保ち続ける人にとっても、現実の困難さは変わりません。その中で、これまでと変わらない毎日を過ごすことが難しかったことも想像に難くありません。諦めた人々を指して、「この連中と同じ扱いにするとは」(「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。」マタイによる福音書 20:12)との不平が出てもおかしくありません。

「待っている甲斐がない」ではないか、と。そして、先に諦めた人々のように、先に現実で見返りを受けている者のように少しでも楽になりたいと、道を踏み外す者も現れます。

だからパウロは、「今、ここで踏ん張れ」と檄を飛ばすのです(「そのような者たちに、わたしたちは主イエス・キリストに結ばれた者として命じ、勧めます。自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。そして、兄弟たち、あなたがたは、たゆまず善いことをしなさい。」テサロニケの信徒への手紙二 3:12-13)。

神の気前の良さを妬むのではなく(「自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。」マタイによる福音書 20:15)、それぞれの手に与えられている働きとしっかりと向き合おう(「わたしたちの神、主の喜びが／わたしたちの上にありますように。わたしたちの手の働きを／わたしたちのために確かなものとし／わたしたちの手の働きを／どうか確かなものにしてください。」詩編 90:17)と。

なぜなら、今、与えられている全ては神からの賜物であり、労苦もまた賜物だからです(「人だれもが飲み食いし／その労苦によって満足するのは／神の賜物だ、と。」コヘレトの言葉 3:13)。

諦めること、全てを投げ出して楽な方へ行くことは簡単です。しかし、苦労の多い時代だからこそ、私たちはたゆまず善を行い続けるのです(「そして、兄弟たち、あなたがたは、たゆまず善いことをしなさい。」テサロニケの信徒への手紙二 3:13)。